第二十五回国際軍事史学会大会参加報告

林　吉永

八月二十九日から九月四日までの七日間にわたって、ベルギー王国の首都ブリュッセルで開催された第二十五回国際軍事史学会大会に出席した。今回は防衛研究所から初めての本格的な派遣というかたちでの国際軍事史学会大会への参加であった。

国際軍事史学会（Commission Internationale d'Histoire Militaire）は第二次世界大戦前の一九三八年に創設された。現在、三十三ヵ国の軍事史研究委員会が登録している。我が国の軍事史研究委員会は軍事史学会（会長・伊藤隆政策研究大学院大学教授）を母体としている。

本年はＮＡＴＯ創設五〇周年にあたる。その本部のあるブリュッセルで大会が開かれた。共通テーマは「一九四五年以降の軍事同盟」であった。二度の世界大戦を経て学んだ教訓を踏まえて、戦後、結成された二国間、もしくは多国間の軍事同盟、言葉を換えて言えば、相互依存、信頼醸成を通して安定確保に努める安全保障体制を軍事史の観点から検討し、二十一世紀の平和と安定に寄与するという含みがある。

出席者数は二百人（その半分以上は外国からの参加）を超えていた。しかし、中国とロシアからは参加者がいなかった。開会式（ベルギー国防大臣が出席）で挨拶に立ったＣ・Ｍ・シュルテン会長は中国の不参加に対して遺憾の意を表明、あわせて国際軍事史学会が非政治的な団体であることを確認するという一幕があった。

大会の日程は次ぎの通りであった。

八月二十九日　午後―受付・登録
　　夕方―公式レセプション
　　夜――ブリュッセル市内見学
八月三十日　午前―開会式
　　午後―ワーテルロー戦跡見学
八月三十一日　午前―研究報告
　　午後―研究報告、総会
九月一日　午前―「大西洋の壁」見学
　　午後―イプル（イペール）戦跡見学

九月二日　午前―研究報告
午後―研究報告、来賓講演
夜――王立軍事博物館見学
九月三日　午前―研究報告
午後―研究報告、来賓講演
夜――公式レセプション
九月四日　午前―閉会式

研究報告は二十八組が行った。報告者の多くがＮＡＴＯ加盟国、もしくは近い将来に加盟が予想される国々からの参加者であったためか、報告には現実感があり、迫力が感じられた。報告テーマが作戦戦闘ではなく、ポリティカル＝ミリタリーを中心に据えた現実の安全保障政策に直結するようなものであったことにも、ある種の新鮮さを感じ、また、充実感を得た。つまり、軍事史研究が防衛問題はもちろんのこと、国際関係、外交、国際法などの関連分野にとっても、基礎として重視すべき研究になっているとの印象を抱いた。

ＮＡＴＯをテーマとした報告もＮＡＴＯ主要国、地中海沿岸諸国、中東・バルカン隣接国、大西洋を挟んだアメリカ大陸の諸国など視点がさまざまで、それぞれのお国柄を反映し、特色が浮き彫りにされていた。中でも、ＥＵ加盟国でありながらＮＡＴＯに加盟していないアイルランドのような国の研究者による報告は出色で、主要国からは犠牲を払わぬ「ただ乗り」、あるい「便乗」と批判されてはいるものの、自国の努力がＮＡＴＯにもたらす貢献を強調し、したたかな生きざまを紹介していたことには、我が国にその考え方を導入しても良いのではないかと思わせられるほど説得力があった。スイスやオーストリアのように中立を標榜しながらも西側寄りの政策を追求してきた国の経験にも学ぶ点は多い。

中立志向の国々の外交・安全保障政策には、表面に見える見えないの違いこそあれ、「一方の側に寄り添って立つ」という理念が前提としてある。中立国と言えども他国との支援・非支援の関係は必然的に存在する。理想的中立に拘泥するとかえって孤立する。加えて防衛政策上の制約も多くなる。ヨーロッパにおいて中立を国是とする諸国の中立政策は決して孤立、自立に固執していたわけではない。日本の選択は多数国間安全保障網の構築を目指すのと同時に、中立志向主義の変化に学び、その上に立って防衛努力に要する費用とその効果を分析し、その結果に基づいて、所属すべき安全保障圏、経済圏を設定し、「便乗」、「ただ乗り」の批判に耐える防衛戦略を打ち出さねばなるまい。重ねて、歴史的考察から、とくに自国の戦略的選択を客観的に評価し、将来を展望する姿勢が要求されると思量する。

参考までに、各報告者名（国籍）、および表題を列記しておく。

八月三十一日
ルイス＝パウロ・マケド＝カルヴァルホ（ブラジル）「全米相互援助条約（一九四七年）」
マシモ・デ・レオナルディス（イタリア）「ヨーロッパの防衛か解放

か―ブリュッセル条約と大西洋同盟の戦略（一九四八～一九五二年）―」
エドワード・J・マロルダ（アメリカ）「同盟国の海軍力とアジアの冷戦」
ホセ＝ルイス・ピチウオーロ（アルゼンチン）「キューバ・ミサイル危機―政治的・軍事的影響（一九六二年十～十一月）―」
ブライアン・T・ヴァン・スウェリンゲン（アメリカ）「アメリカ軍の構成とドイツ駐留（一九四五～一九九〇年）―戦争と平和の可変建築―」
マーガレット・イザベル・キャンベル（カナダ）「香港の影　戦略と作戦の二分法―在ドイツ北部カナダ旅団の作戦計画に対するカナダの影響力行使の試み（一九五一～一九六二年）―」
エリザベス・デュ・レオ（フランス）「フランスとヨーロッパ防衛体制構築の第一段階」
ブリュノ・トーベ（ドイツ）「軍事的安全か社会的安全か―西ドイツ駐留ＮＡＴＯ軍の経費負担にまつわる論争（一九五二～一九六七年）―」

九月二日
フリッツ・ストークリ、エルヴェ・ド・ヴェック（スイス）「冷戦期スイスの防衛準備―自立かＮＡＴＯとの協調か―」
ハンス・ルドルフ・フューラー（スイス）「独自路線現象―冷戦期のいわゆる『スイス＝ＮＡＴＯ』同盟問題―」
マンスフリード・ラウヘンシュタイナー（オーストリア）「永世中立とＮＡＴＯ―オーストリアの場合―」
アーメイ・カニネン（フィンランド）「第二次世界大戦後のフィンランドの軍事的中立―現実か幻想か？―」
ボ・ヒュージマーク（スウェーデン）「菓子を食べてもなくならない―中立国への援助―」
ダーモ・キョー（アイルランド）「アイルランドとＮＡＴＯと冷戦（一九四九～一九六三年）」
ヤン・ホフナー（オランダ）「ＮＡＴＯに対するオランダの軍事的貢献（一九四九～一九九九年）」
ジャン＝ミッシェル・スターケンドリー（ベルギー）「ベルギーと西ヨーロッパの安全保障（一九四四～一九五五年）」
ヌノ・セヴェリアーノ・テルクセイラ（ポルトガル）「ポルトガルとＮＡＴＯ―その政治的・軍事的プレゼンスの増大（一九四九～一九九九年）―」
ホセ・S・メンデス（スペイン）「北米＝スペイン防衛安全保障協定のヨーロッパに対する寄与」

九月三日
レイモンド・ルラージ（イタリア）「地中海とイタリアとＮＡＴＯ」
ピエルパオロ・ラモイノ（イタリア）「一九五〇年代の地中海におけるＮＡＴＯとイタリア海軍」
タドゥーズ・パネツキ（ポーランド）「ワルシャワ条約機構の中のポー

ランド」
ジョゼフ・ザシャー（ハンガリー）「ワルシャワ条約機構とハンガリー動乱（一九五六年）」
ミロスラフ・プチク（スロバキア）「ワルシャワ条約機構の計画におけるスロバキア」
ディミター・ミンチェフ（ブルガリア）「ワルシャワ条約機構の中のブルガリア」
ペトル・オツ、アレッサンドル・ドゥツ（ルーマニア）「冷戦期のルーマニア軍」
イオアニス・ルーカス（ギリシャ）「東地中海の地政学的体系と冷戦期のＮＡＴＯ」
ハサン・コニ（トルコ）「トルコのＮＡＴＯ加盟」
マティ・マイゼル（イスラエル）「ここでもあそこでもない―イスラエル新国家と世界大同盟―」

なお、九月二日には元ＮＡＴＯ事務総長ウィリー・クラース氏と元ベルギー外相で欧州委員会委員を務めたダヴィニョン子爵が出席し、それぞれＮＡＴＯの現状と将来やＮＡＴＯにおけるベルギーの立場について講演した。また、翌三日には元フランス首相・国防相ピエール・メスメール氏が出席し、ド・ゴール時代のフランスの対ＮＡＴＯ政策を回顧し、あわせてＮＡＴＯの将来について語った。

仏独両大国の狭間に位置するベルギーは戦争の名残に事欠かない。今回は幸運にも以下に述べるような、とりわけ名高い戦跡を見学することができた。なお、戦跡見学は使用言語（フランス語、ドイツ語、英語）をもとに参加者を五グループに分けて実施された。

八月三十日午後は、ナポレオン率いるフランス軍とウェリントン率いるイギリス軍が会戦したワーテルローを訪れ、戦場そのものや両軍陣地の所在地等々を見学した。また、当時の軍装を身にまとった一団によるデモンストレーションもあり、ナポレオン時代の戦闘様式の一端を垣間見ることができた。

九月一日午前は、ドーバー海峡に面したオーステンドを訪れ、イギリス軍が海を渡って進攻してくることを予想し、それを防ぐためにドイツ軍が構築・強化した「大西洋の壁」を見学した。また、午後には第一次世界大戦時に初めて毒ガスが使用されたというイプル（イペール）を訪れ、各国軍将兵の墓所、戦争博物館等を見学した。

調査研究と言えども、机やパソコンに齧りついてばかりではいけない。「百聞は一見に如かず」ということが往々にしてある。見なければわからないものは多いし、勘違いしたまま気づかずに済ましてしまうことにもなりかねない。わけても戦争の歴史を追求するには、戦史現地研究は重要、かつ、最短の方法であろう。

全体として、今回の大会がＮＡＴＯ五〇周年を記念する大会であり、テーマも二十世紀の総決算といった色合いが強く、さらに二十一世紀の

展望にまで立ち入るほど内容が濃かった。参加すること自体、非常に有意義であった。とくに各国の実力の優劣、わけても小国の生きざまにあたっては、熾烈なサバイバル・ゲームを展開する中、きわめてしたたかな国家戦略を打ち出していたことを知ることができ、我が国についても日米同盟下、強国の恩恵に卑屈になることなく、国家としての生きざまに自らの主張を色濃く表出させると同時に、友好国の国益にも寄与する防衛政策を確立させる時期が来ているのではないかという感を強くした。

さらに、軍事史研究が単に自己満足的なマニアックな世界に浸るのではなく、防衛政策に重大な影響を及ぼす研究分野であることが認識されているという事実をこの国際大会に出席して気づかされた。本大会でも主催国の現職の国防大臣や外務大臣経験者が出席してコメントするなど、国家が軍事史研究に高い評価を与えており、現在、並びに将来の国家生存、そして国家繁栄を視野に入れた戦略構想の立案と密接なつながりを持っていることを感じた。

そうした意味で、重ねて今次大会への参加を高く意義づけ、フィールドを共有し、かつ、防衛政策に影響を及ぼし得る友人を世界に数多く持つためにも、今後、継続して国際軍事史学会大会への参加を推進すべきであり、可能な限り、毎回、防衛研究所戦史部から研究報告者を立てるなど国際交流の一環としての活動を定着させていきたい。

ちなみに、次回（第二十六回）大会は二〇〇〇年七月三十一日から八月四日にかけてはストックホルム（スウェーデン）において、八月九日には場所をオスロ（ノルウェー）に移して開催される。共通テーマは「総力戦・総合防衛の二〇〇年―一七八九～二〇〇〇年―」である。また、二十一世紀最初となる第二十七回大会は二〇〇一年八月十九日から二十五日にかけてアテネ（ギリシア）で開催される予定である。共通テーマは「二十世紀の武力紛争と地政学」となっている。

最後に、今回の国際軍事史学会大会参加、並びにベルギー、フランスにおける公務全般にわたっては、現地防衛駐在官である石野一等空佐、岩下一等空佐の並々ならぬご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。